

高齢社会と高齢者の人間関係

古谷野 亘

一 日本の人口高齢化

人口の高齢化は現在の日本社会を特徴づけるキーワードのひとつである。人口高齢化は、総人口に占める高齢者の割合が高くなる現象である。日本では、暦年齢で六五歳以上の人を「高齢者」とし、総人口に占める六五歳以上の人の割合（しばしば高齢化率とよばれる）が七%以上になると「高齢化社会」、一四%以上になると「高齢社会」であるとする用語法が一般に用いられている。

国勢調査によれば、二〇一五年の日本の人口は約一億二、七〇九万人であり、うち六五歳以上人口は三、三八六万人（二六・六%）であった。〇〇一四歳の人口は一九八〇年以降、一五〇六四歳の人口は一九九五年以降それぞれ減少に転じ、今後も減少が続くと予測されている。他方、六五歳以上人口、特に七五歳以上の人口のみが、これまで一貫して増加してきており、今後も増加し続けると予測されている（図一）。

高齢化率（六五歳以上人口割合）は、一九七〇年に七%に達し、一九九四年には一四%に達した。高齢化の速さ

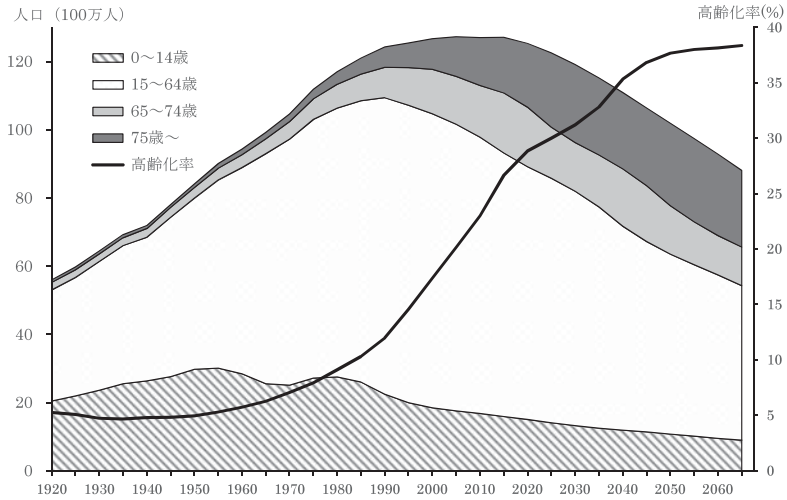


図1 日本の人口の推移

資料：2015年までは総務省統計局「国勢調査」、2020年以降は国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口」（平成29年推計）。

を示す倍化年数（高齢化率が7%から一四%になるまでの期間）は二四年で、これまでのところ世界で最も高齢化の進展が速い。高齢化率は今後も上昇し続け、二世紀の中ごろには総人口の約四割が六五歳以上の高齢者になると予測されている。

人口構造の変化がゆるやかに進む場合、それに対応するのは比較的容易である。しかし、日本では人口高齢化の進展が非常に速いため、多くの課題が噴出してきている。それは、たとえば要介護高齢者の急激な増加、医療・介護資源の不足、社会保障の財源不足、労働力の不足と高齢化、交通インフラの再整備の必要性、元気な高齢者の増加、社会的に孤立した高齢者の増加などである。これらの課題の中には、よく知られているものと、あまり知られていないものがある。

本稿で取り上げる高齢者の人間関係の研究は、社会的に孤立した高齢者の増加という課題に関連する基礎的研究である。

二 高齢者の人間関係に関する研究

高齢者の社会的孤立の問題に対処するためには、まず高齢者の人間関係の実態を知ることが必要である。高齢者の人間関係（社会老年学の用語では社会関係）は、社会老年学においてこれまで最も精力的に取り組まれてきた研究テーマのひとつであって、日本の高齢者についても多くの研究が行われてきた。²⁾ 日本では、高齢者の社会関係に関する研究は、高齢者と家族との関係から始められた。最初は主として既婚者との同居・別居に関する研究であったが、やがてサポートの授受などの家族成員間に関する研究に発展し、さらにサポートの授受などを指標として家族と家族成員以外の他者（本人以外はすべて「他者」である）との関係に関する研究に発展してきた。

ひとつの研究例として、筆者らが東京都世田谷区と山形県米沢市で行った調査研究の結果を紹介する。この研究では、六五〜七九歳の高齢者を対象に、さまざまな統柄の他者一人一人との関係を探ね、分析した。図2は、「一緒にいてほつとする」人の割合（折れ線）と「ちよつとした用事をしてくれた」人の割合（棒）を統柄別にまとめたものである。「一緒にいてほつとする」は情緒的な親密さの指標、「ちよつとした用事をしてくれた」は手段的サポートの指標である。なお、世田谷区での調査結果と米沢市での調査結果はほぼ同じだったので、ここでは両者の合計を示している。

配偶者、特に妻は、最も情緒的に親密な他者であり、同時に最もサポートを提供してくれる他者でもある。情緒的な親密さで配偶者に次ぐのが娘である。特に別居の娘は、サポートの提供では同居の娘に遠く及ばないものの、情緒的な親密さでは同居の娘を上回っている。老親からみたとき、サポートの授受がなくても、別居の娘は、息子

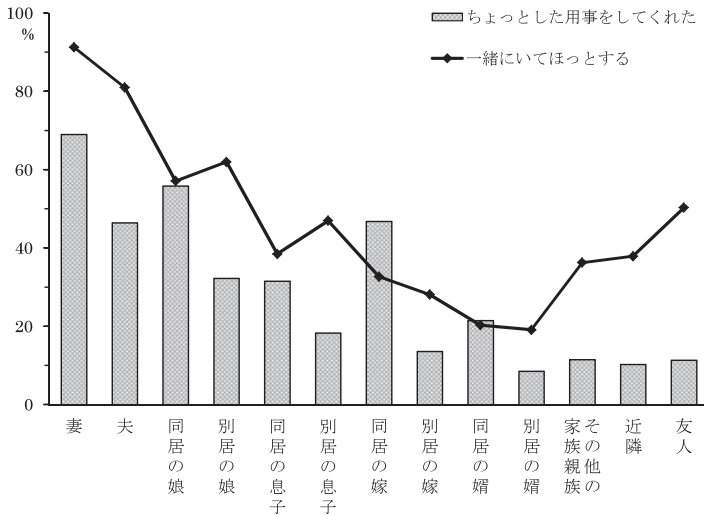


図2 一緒にいてほっとする人・ちょっとした用事をしてくれた人の割合

出典：文献(3)より作成。

や同居の娘以上に「かわいい」ということである。

ほとんどの続柄の他者で、「一緒にいてほっとする」人の割合が「ちょっとした用事をしてくれた」人の割合を上回っている。これは、「一緒にいてほっとする」ような情緒的に親密な人の一部との間で手段的サポートの授受が行われていることを意味し、きわめて自然な人間関係のあり方である。唯一のいちじるしい例外が同居の嫁であって、親しさを欠いたままサポートの授受を行うという不自然な関係にある。しばしば指摘される嫁と姑の葛藤は、この不自然な人間関係のあり方から生じている。

この研究の結果からもうかがえるように、これまでに行われた日本の高齢者の社会関係に関する研究からは、高齢者にとって家族は特別な存在であり、ほとんどすべての種類のサポートを提供できる安定したサポートの源泉であること⁽⁴⁾、しかしすべての家族成員が同じ関係にあるわけではないこと⁽⁵⁾などが知られている。また、家族・親族以外の他者との関係についても、

たとえば大都市の高齢者の場合、交流のある他者には学校や職場で知りあった人、地方都市の高齢者では近隣、学校、職場で知りあった人が多く、ある面では家族・親族以上の存在でありうることなどが知られている。⁽⁶⁾⁽⁷⁾そして、それらの他者たちとの間では関係の重複が高率に認められ、関係が重なるにつれて親しさが増していくことも報告されている。⁽⁹⁾

しかし、高齢者の社会関係に関する研究で取りあげられてきた親族以外の他者は、個人が生涯に出会うおびただしい数の他者の中から選択され、残されたごく一部であるにすぎない。しかも、「友人」や「お付き合いのある方」⁽⁶⁾、「気心の知れた方」⁽⁷⁾などの親密な間柄にある他者に限定されている。⁽¹⁰⁾また、毎日の生活で出会う、必ずしも親密な間柄にあるとはかぎらない他者についてはほとんど知られていない。

そこで筆者らは、高齢者が日常生活において交流している親族以外の他者について、網羅的かつ詳細に把握することをめざして研究を続けている。以下に、その途中結果を紹介する。⁽¹⁾

三 日常生活において交流している他者

人が毎日の生活で会っている親族以外の他者ないしは見かける他者にどのような人がいるかを考えると、「友人」「役割関係にある人」「あいさつをする人」「よく見かける人」「風景」の五種類がありそうである。「風景」というのは、たとえば駅で電車を待っている間に目にする向かい側のホームの人などであって、個人として識別されおらず、交流もない。また「よく見かける人」は、一方的に「見て」いるだけの他者なので、その人との間で交流があるとはいえない。そこで、高齢者が「日常生活で交流している親族以外の他者」にあたるのは、「友人」「役割関

係にある人」「あいさつをする人」である。「友人」や「役割関係にある人」に対しても、会った際にはあいさつをするであろうから、「日常生活で交流している親族以外の他者」にあたるのは、あいさつ以上の交流のある他者ということになる。

先行研究のレビューと概念的な整理、そしていくつかの事例の検討から、「日常生活で交流している親族以外の他者」、すなわち「あいさつ以上の交流のある他者」には、「目的内関係の他者」「場を共有する他者」「特に親密な他者（友人）」という三つのタイプがあると考えられた。¹¹ 「目的内関係の他者」とは、職場の同僚、医師・看護師、店員などの役割関係にある他者である。このタイプの他者との関係では、交流そのものが目的ではなく、何らかの目的を達成する必要から、必要の範囲内で交流が生じる。「目的内関係の他者」という語は、交流が目的の達成に必要な範囲内で行われることからきている。「目的内関係の他者」との関係では、良好な関係を維持することが目的達成のために有利なので、良好な関係を作ろうとする力が働く。しかし、「目的内関係の他者」との関係は役割に基づく関係であるから、交流する他者が特定の個人である必然性はなく、目的がなくなれば関係は消失する。高齢者を含む社会人の場合、日常生活で交流する他者の中では、この「目的内関係の他者」が最も多いと予想される。

「場を共有する他者」とは、特定の場所あるいは場面を共有している他者であって、公園や病院の待合室で会う人、近所の人などである。日常生活においてあいさつ以上の交流をする人の多くは、「目的内関係の他者」を除くと、「場を共有する他者」であろう。「場を共有する他者」との関係では、交流は場の共有によって偶発的に発生する。このタイプの他者との間でも、良好な関係を保った方がその場を快適に過ごせるので、良好な関係を作ろうとする力は働く。しかし、その力は「目的内関係の他者」の場合ほど強くはなりにくい。その場を離れたら、無視したりすることもできるからである。「場を共有する他者」との交流は偶発的に発生するものであるから、交流する他者

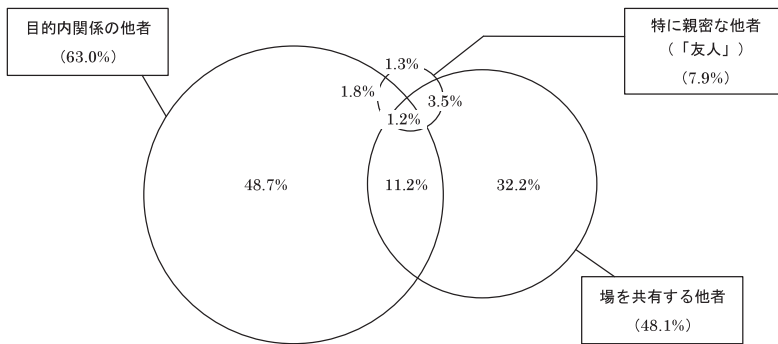


図3 高齢者が日常生活において交流している他者の分類と頻度
 出典：文献 (11)。

が特定の個人である必然性はなく、場の共有がなくなれば関係は容易に消失する。

一般に「友人」とよばれることの多い「特に親密な他者(友人)」は、ほとんどが「目的内関係の他者」「場を共有する他者」として知りあった後、何らかの経緯を経て一定水準以上の親しさを有するに至った他者である。このタイプの他者との関係では交流そのものが目的になり、他者では代えることができない。そして、「特に親密な他者(友人)」との関係では、目的や場の共有がなくなると交流頻度が減ることはあっても、関係そのものは長期にわたり維持されやすい。たとえば、「学校時代の友人」との関係である。しかし、高齢者を含む社会人の場合、毎日の生活で出会い、交流する他者の中で「特に親密な他者(友人)」の割合は低いであろう。

このような他者の分類の適否を検討し、「高齢者が日常生活において交流している他者」を把握するための調査研究方法の開発を目的として、小規模なパイロットスタディを行った。東京都内に居住する六五〜七四歳の単身もしくは夫婦のみ世帯の高齢者(男女各三三人)の協力を得て、三日間に「あいさつを交わした家族・親族以外の他者」をすべて記録してもらい、分析した。

六六人の高齢者は、三日間に合計一、四四五人の他者と「あいさつを交わす」以上の交流をしていた。交流があった一、四四五人の他者の中で最も多かったのは、「目的内関係の他者」（六三・〇％）であって、「場を共有する他者」（四八・二％）が続いた。「特に親密な他者（「友人」）」は七・九％のみであった（図3）。三つのタイプの間で重複はあったが、多くはなかった。⁽¹⁾

IV 考察

人は他者を「友人」「近所の人」「職場の同僚」などのカテゴリーに分類し、周囲の人々との関係を整理している。しかし、その分類の基準は曖昧で、いくつかの側面を切り捨てているのがふつうである。たとえば、「友人」は親密さの程度による分類で、交流の頻度や知りあつたきつかけなどを考慮していないし、「友人」と認める親密さの水準は人それぞれである。また、「近所の人」「職場の同僚」は知りあつたきつかけによる分類であつて、親密さの程度や交流の内容は考慮されていない。高齢者の社会関係に関するこれまでの研究は、高齢者自身によるそのような分類に依拠して行われていた。

それに対して、「目的内関係の他者」「場を共有する他者」「特に親密な他者（「友人」）」という他者の分類は、曖昧で多義的な日常語による分類を離れ、学術用語による分類に代えるという性格をもっている。またこの分類は、高齢者以外にもそのまま適用できることから、高齢者と若年者との比較を容易に行いうるようにするであろう。

パイロットスタディの結果からは、大都市の高齢者が日常生活において交流している親族以外の他者のほとんどが「目的内関係の他者」と「場を共有する他者」であり、「特に親密な他者（「友人」）」はきわめて少ないことが明

らかになった。学生・生徒の場合には「特に親密な他者(友人)」の割合がより高いと予想されるが、教師や店員、アルバイト先で出会う他者などの「目的内関係の他者」や、「特に親密」とはいえない級友などの「場を共有する他者」も決して少なくはないであろう。

今後は、より大きな、できれば代表性を備えた高齢者のサンプルで検証することが必要であり、さらに他の年齢層の人との比較を行ううのも興味深いことである。

(二〇一八年五月三〇日「キリスト教と諸学の会」発表)

引用文献

- (1) 古谷野亘、安藤孝敏編著『改訂・新社会老年学・シニアライフのゆくえ』ワールドプランニング、二〇〇八。
- (2) 古谷野亘「高齢期の社会関係―日本の高齢者についての最近の研究」『聖学院大学論叢』二二(三)、一九一―二〇〇、二〇〇九。
- (3) Koyano W, et al.: Social relationships of the Japanese elderly: Importance of nuclear family tie and the dilemma of daughter-in-law living together. *Hong Kong Journal of Gerontology*, 10, Supplement, 338-342, 1996.
- (4) Koyano W, et al.: The social support system of the Japanese elderly. *Journal of Cross-Cultural Gerontology*, 9, 323-333, 1994.
- (5) 古谷野亘、ほか「老親子関係に影響する子ども側の要因―親子のタイを分析単位として」『老年社会科学』一六、一三六―一四五、一九九五。
- (6) 古谷野亘、ほか「都市男性高齢者の社会関係」『老年社会科学』二二、八三一―八八、二〇〇〇。

- (7) 古谷野亘、ほか「地方都市における高齢者の社会関係―気心が知れた他者の特性」『老年社会科学』二九、五八―六四、二〇〇七。
- (8) 矢部拓也、ほか「都市男性高齢者における社会関係の形成―『知り合ったきっかけ』と『その後の経過』」『老年社会科学』二四、三一九―三二六、二〇〇二。
- (9) 古谷野亘、ほか「関係の重複が他者との交流に及ぼす影響―都市男性高齢者の社会関係」『老年社会科学』二七、一七―二三、二〇〇五。
- (10) 澤岡詩野、古谷野亘「社会関係の研究において用いられている非親族との関係の指標―日本の高齢者を対象とした最近の量的実証研究のレビュー」『老年社会科学』三三、四七―五九、二〇一。
- (11) 古谷野亘、ほか「高齢者が日常生活において交流している他者との関係―その分類と把握」『老年社会科学』三八、三四五―三五〇、二〇一六。